

連載⑦

内海善雄の
(ITU前事務総局長)

やぶ睨み 「ネット社会」論

機能しなくなった和魂 「武士に「一言なし」は消えた

新国立競技場の整備問題ほどあきれ返ることはない。関係者の言動は、政治学者の丸山真男が説いた「無責任の体系」を絵に描いたようなものである(丸山は、東京裁判において日本の軍国指導者たちはナチ指導者とは対照的にみな口を揃えたように自らの無責任を主張したとしている)。

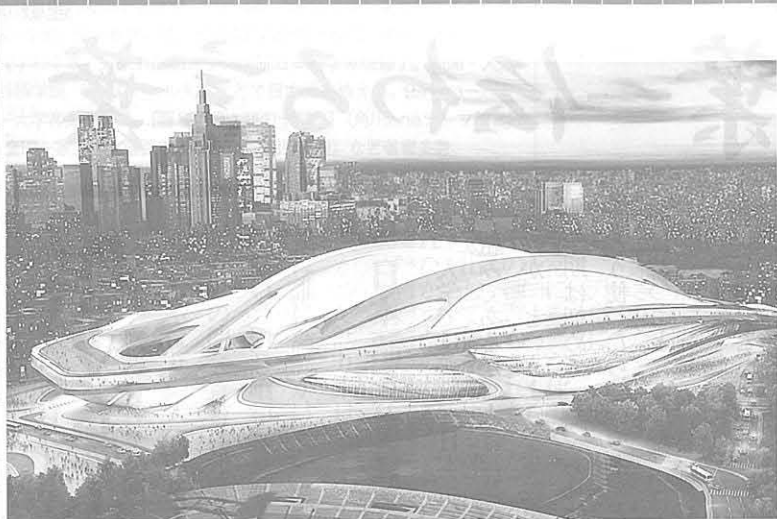
「多額の経費がかかることは問題だが、間に合わないから変更はできない」と口を揃えて主張していた者たちが、総理の白紙撤回の決断の後には、恥ずかしげもなくやり直しに取り組んでいる。武士の世なら切腹ものである。この人たちには、「武士に「一言なし」という格言はまったく通用しない。

あだな日本人の高い倫理観

私はITUの事務総局長として国際社会で

しかし、西欧にはノブレス・オブリージュ(nobless oblige 高貴なる者の義務)という文化がある。支配者で富裕な貴族階級には、それ相応の社会的、道徳的な義務があるというものだ。英国の王子が兵役を遂行している姿が典型例としてよく報道される。

ノブレス・オブリージュには、おそらく「約束を守る」「いい加減な発言はしない」というような道徳的な規範も含まれるに違いない。ただそれは貴族であるという地位や豊かさか



いろいろと考えさせられる契機になった

働いた八年間、職員や各国代表の発言を真に受けて煮え湯を飲まされることが何度もあった。英国で教育を受けたスペイン人の秘書からは、「貴方と同じ倫理観を持っている者など、誰もいないことを肝に銘ずるべきだ」という苦言を呈された。しかるべき地位にある人を初めから疑って付き合わなければならぬことは、頭では分かっているが、幼い頃から「武士に「一言なし」と嫉妬られて育った者にはなかなか難しい。西欧社会には、「武士に「一言なし」と同様の考えはないのだろうか。

ことわざ辞典には、相当する英語の格言として次の二つが挙がっている。

- ① A man's word is as good as his bond.
(言葉は、証文と同然である)
- ② A bargain is a bargain. (取引は、取引である)

しかし、一番目のA man's word is as good as his bondは、契約社会において「言葉での約束でも書面の証文と同じ価値がある」というルールを述べているのであって、「民・百姓はともかく、エリートで支配階級の武士は約束を違えない、嘘はつかない」という意味とはかなり異なると思う。

らくる義務であって、没落した者にも貴族であつたという出自だけで求められるものだろうか? どうもドライな社会的契約的な関係のように思えてならない。

一方、日本では時代劇などではむしろ浪人の武士が片意地を張って「武士に「一言なし」と発言するシーンが登場する。地位や豊かさではなく、人格そのものを構成する高い道徳であり、個人の誇りのようなものが感じられる。それは、決して社会的な関係ではなく、個人の品格に思える。

嘆かわしい日本の現状

最近、世の中を騒がせている事件を見ると、新国立競技場問題に限らず、この「武士に「一言なし」がすっかり通用しないことを思い知らされる。

第一に、安全保障問題である。政府や与党議員たちは過去にどのような憲法解釈をしてきただろうか。これらの政府幹部や与党議員は、政権が変わったらその言動をまた即座に約変させるに違いない。「武士に「一言なし」を堂々と示したのは、歴代の法制局長官OBだけであった。

東芝粉飾決算事件はどうであろうか。動機はどうあれ、嘘をつき、騙していたわけだから、「武士に「一言なし」以前の問題である。多数の経理担当者が一斉に不正を行ったことは、まさに冒頭の「無責

A honest man's word is as good as his bond. (正直者の言葉は、証文と同じだ)という表現もある。こちらは「武士に「一言なし」に近いが、正直者一般のことを言っているのであつて、武士のような特定の身分・階級の者のあり方を述べているのとは異なる。

一番目のA bargain is a bargainは、同義語の羅列だから、いかようにでも解釈できる。そもそもbargainとは、一定の義務を負う代わりに相手に一定の要求をする合意のことであり、「一見、期待ができないような言動も、取引の結果であれば期待できる」というような意味ではないかと思われる。あるいは、「取引の約束だから、実行される約束だ」などとも解釈できよう。いずれにしても、この格言は取引の意味や性格に着目したものであり、エリートの人格や行動規範を説く「武士に「一言なし」とは、大きく意味合いが異なる。

彼我の考え方の差

このように、英語には「武士に「一言なし」にぴったりの格言はなさそうである。格言がないということは、誰でもが口にする文化や道徳規範ではないということだろう。

任の体系」そのものである。

原発再稼働を反対する多くの者も「武士に「一言なし」の精神が欠如している。なぜならCO₂問題や景気問題での発言と相矛盾するからである。「武士に「一言なし」とは、単に前言を翻さなければよいということではない。物事に首尾一貫した考えを持ち、人格分裂を起さないといいことだと思ふ。そのためには、軽はずみな発言はせず、言動に責任を持つということである。

いたるところで見られる嘆かわしい「無責任の体系」の日本社会で、真逆の「武士に「一言なし」の人格的な品格を一般人に期待することは、もう無理なのかもしれない。

日本古来の道徳意識や倫理観が希薄になった今日、それに代わるものとして、西欧のように特定の階級の者の社会的な義務、あるいは特定のポストに就くための資格要件などとして捉える考え方が形成されていくのかもしれない。いずれにしてもリーダーの資質が今こそ問われている時はない。



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現な海総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務総局長就任。現在は一般財団法人「協力」理事。IEEE名誉会員。